

地域に根ざし、持続可能な未来を切り拓く児童の育成  
～E S Dの日常的な実践を目指して～

須賀川市立白方小学校 校長 内山 博行

## 1 研究の趣旨

平成23年3月11日の東日本大震災とそれに伴う東京電力福島第一原子力発電所の事故により、本校の教育活動は大きな制約を受けた。厳しい状況の中、児童は懸命に学習活動を続けていた。本校は平成26年の夏に校地内の全面除染が終了し、正常な教育活動が可能となった。そのような状況であるからこそ、現状を見つめ、未来を切り拓く児童を育てたいと考え、ユネスコスクールに加盟し、E S Dの視点に立った教育活動を展開することとした。(※ユネスコスクール加盟は平成25年9月)

## 2 研究の概要

### (1) 「白方小のE S Dで育む4つの能力・態度」の設定

- ① 本校では、国立教育政策研究所「E S Dの視点に立った学習指導で重視する能力・態度」をもとに、「生きる力」との関連を考慮し、児童の実態を重視しながら再構成して、「白方小のE S Dで育む4つの能力・態度」を設定した。
- ② 設定した4つとは『多様な観点から考え、見通しを持ってよりよい解決策を考える力(多様な観点と見通し)』『気持ちや考えを交流させ、協力して取り組む態度(交流と協力)』『様々な人や社会などとのつながりを尊重する態度(つながり)』『よりよい未来を目指し、その実現に向けて主体的・計画的に取り組む態度(主体的・計画的態度)』である。

### (2) 各教科等でつけるべき力とE S Dで育む力の双方を高める新たな単元の目標の設定

- ① 各教科等で達成すべき目標を達成し、生きる力を育むためにE S Dの考え・手法を位置付ける。
- ② 「各教科等の単元の目標」と「E S Dで育む力」を合わせた「E S Dの視点に立った新たな単元の目標」を設定し、それを実現するための学習活動を意図的・計画的・日常的に実践する。

### (3) E S Dの視点に立った特色ある教育活動及び指導の展開

- ① 教師側の指導方法に関しては、授業・その他の活動において、児童の主体的な話し合い・表現活動を重視し、「E S Dカレンダー」に基づいたE S Dの日常的な実践に努めている。
- ② 生活科・総合的な学習の時間を中心として、「ふるさと学習」(1・2年)・「地域学習(県・全国)」(3・4年)・「外国との交流学习」(5・6年)を展開している。特に、5・6年生では、ビデオレターを作成し、海外へ向け自分たちの思いを発信する活動を継続している。

### (4) 授業以外の場でのE S Dの視点に立った実践

- ① 児童会活動の一環として「福島議定書」への参加をはじめ、エコキャップやプルタブ回収、ユネスコ寺子屋募金への協力、給食残食量調べ等、授業の発展的活動として取り組んでいる。
- ② 全校生による愛校作業や宿泊学習での「地球にやさしい野外炊飯」、特設サイエンスクラブによる「ビオトープ」を活用した活動等、E S Dの視点に立った活動を積極的に展開している。

## 3 成果と今後の課題

### (1) 研究の成果

- ① どの教科・活動でも、児童が友達や外部人材との交流を通して、課題に対する多様な物の見方があることに気づき、他と協力しながら解決策を見いだそうとする態度が育ってきた。
- ② ふるさと・地域・外国との交流学习を推進することにより、児童の身の回り(生活圏)はもとより、他地域・外国を視野に入れた人・環境・社会とその将来等について視野が広まってきている。

### (2) 今後の課題

- ① 児童の課題に対する多様な考えを持つ態度は育ってきているが、相手意識を持って相手に伝えることや他の考えを取り入れてよりよい解決策に結びつけようとする力には個人差が大きい。
- ② E S Dで育む力の評価は数値化は難しく様々な方法で評価を行う必要がある。児童のE S Dの学びの成果を職員・児童・保護者はもとより地域住民等も実感できる評価方法が今後重要となる。